

ロンゲラップ島の放射線調査・研究などの資料を寄贈される

広島大学原爆放射線医学研究所国際放射線情報センターの高田純助教授より平和協会に対し、「一九九九ロンゲラップ島の放射線調査の第一報告書」英文版 (RADIOLOGICAL INVESTIGATIONS IN RONGELAP ISLAND) 1999 THE FIRST REPORT ORT 二〇〇〇年一月発行)、「世界の放射線被曝地調査」(講談社ブルーバックス二〇〇二年一月刊)など三点の資料が寄贈されました。

高田さんは、一九九五年より世界各地の放射線被曝調査をすすめ、ロンゲラップ島では一九九九年に調査をおこない、「ロンゲラップ本島には再定住は可能」との結論を導きだしています。報告の概要は日本語では講談社のブルーバックスで読むことができます。

島田興生さんが来館し資料を寄贈、平和協会の川崎会長が謝辞のべ、調査の内容について報告、意見交流をしました。

本の紹介

フォト・ドキュメント
いのち抱きしめて
—在宅看護十三年
田辺祥子(文)
田邊順一(写真)

ながく原水爆禁止運動・被爆者援護運動などで活動され、第五福竜丸平和協会の理事、顧問を務められた田沼肇さんは、進行性核上性麻痺という神経難病により、二〇〇〇年八月九日に亡くなりました。

病と介護の現実、共により良く生きる田沼夫妻の日常生活のありようをあたたくみすえたドキュメントとなっています。

「人生の最後を幸福に生きられる社会をつくる、という願いは、よい人を育て、よい社会をつくる」ことを生涯の目標としていた田沼肇の遺志でもあります。田沼祥子さんが「まえがき」に記していることです。

難病による身体障害者手帳の交付を受けたとき「自ら身体障害者となることによって、社会をみるもう一つの窓が開かれた」と記した田沼肇さん、一九九三年の、重度心身障害者手当非該当の却下取り消しを求める裁判の提起も、よい社会をつくるための、福祉行政を問う、不断の努力の実践であったのでした。本書には、被爆者の原爆症認定裁判に励まされるようにして「田沼裁判」の提起に至る思いも書きこまれています。

介護や援助を受けることを余儀なくされた人々(高齢者の多くを含めて)、それまでの生活経験に即して、いままでどおりの生活をつづけることができる介護や援助、その保障はどうあらねばならないか、個々の人間の権利と尊厳はどうまっとうされ、どう確立されるべきなのか。

「想像をこえた病人や障害者のおかれた現実」のなかで、「心身の重い障害と共存しながらも、人々の愛につつまれ豊かに暮らし、た姿をお読みとりいただければ幸いです」とも祥子さんは書かれています。

生きることへの信頼と励ましを支えにともに「豊かに暮らした」と語りえた田沼さんの十三年の日常を思い量りながら、「人生の最後を幸福に生きられる社会」「よい人を育て、よい社会をつくる」—我が身に即しての問いかけがのこりました。

(協会理事 山村茂雄)
四六判 日本評論社 一九〇〇円
ビジュアルルーム完成
第五福竜丸展示館の二〇〇二年度の最初の展示替えは、視聴覚映像資料を視聴できるコーナーを設置するため、これまで資料室として資料置き場に使ってた部屋を改装し、ビジュアルルームとしてリニューアルしました。展示館が所蔵する映像資料を観ることができ

広島夏の夏で考えたこと

関口和

原水禁国民会議の事務局長をリタイアしてから早一〇年が経過しました。しかし、できるだけ、せめても夏の大会時期位はお手伝いをして心掛けてきました。隔年毎に広島と長崎と決め実行、今年も長崎のつもりだったが三〇年前に、職場で一円募金で建立した国鉄に働く被爆者の慰霊碑での慰霊祭に出席の約束もあつて昨年に続き広島に参加することにしました。その中で会議、慰霊祭、交流会など多くの被爆者にお会いし話しをする機会がありました。

被爆者は、老いても元気

私が、現職の時に結成した、職場の被爆者組織、単産被爆協や被爆連、県被爆連の幹部活動家(?)とも交流しましたが、平均年齢は七四歳で例外なく病院通いで苦しんでいます。それでも多くの人は、被爆者こそ語り部の現役として活躍しなければと決意し、あらゆる機会をとらえ活動しています。その一人、被爆教師の会会長の石田明さんは最近、皮膚ガンを宣告され手術間近で安静の時期なのに、被爆電車に乗って子供たちに体験を語り、翌日の分科会では「被爆の実

相」と題し講師を務めていました。石田さんはまだ死ねない。必ず生還すると張り切っており、参加者に感銘を与えたただ頭の下がる思いでした。

平和宣言は素晴らしかった
今年の市長の平和宣言は注目されていきましたが、アメリカのブッシュ政権の核政策、インド、パキスタンの緊張を正確にとらえ、アメリカの態度を批判し、核戦争による唯一つの被爆国の日本は、非核三原則を法制化すべきと訴えたのは、時宜をえたもので九日に発表された長崎の宣言とともに評価されます。

一方、首相は、「長崎には行かない」、「被爆者とは去年会ったから、今年には役割分担で会わない」とただをこね、結果的には、長崎には行ったが被爆者とは会わず、広島では八月一日からオープンしている「国立の祈念会館」では、改めてテープカットという演出などテレビ政治家で呆れかえってしまいました。

在外被爆者の問題は早期解決を
日本被爆協が全国各地で出した、「原爆症認定」の七十七人の集団申請は、高齢化している被爆者の現状から考え、被爆

者にたいする国家補償という立場からも急がなければなりません。日本で被爆して、さまざまな事情で現在外国で生活している人びとの問題が未解決で放置されています。

ブラジルから来日した向井春治さん、韓国からの李一守さん、在日の朝鮮人被爆者協議会会長の李実根さんの三人から異口同音の広島弁での訴えを切々と聞きました。今更ながら政府の非人道的な差別扱い、そして、私たちの運動の目線・視点の欠如を知らされました。

厚生労働省は、今年から約五億円の予算で、約五千人いるとされる在外被爆者に、日本で治療を受けるための渡航費助成などを柱とする在外被爆者支援事業を華々しく打ち上げました。

ところが、応募者は現在、皆無です。高齢化した被爆者が渡日するのは困難であり、近い韓国でさえ、現地での治療が受けられるように法律改正を求められ事業の留保となっており、北、南のアメリカに在る日本国籍の被爆者団体も受入を拒否しています。厚生労働大臣は、国会で被爆者はどこにいても被爆者とはつきり言明しています。どこにいても同じ手当の支給、治療の責任を果たすのが政府の責任ではありませんか。

(せきぐち かのぶ/原水爆禁止日本国民会議顧問、平和協会評議員)

福竜丸だより



都立・第五福竜丸展示館 ニュース

発行 (財)第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

戦争展で第五福竜丸コーナーをつくって

佐藤 志穂 (高校三年)

私が初めて「第五福竜丸」に出会ったのは去年、高校二年生の夏休みでした。初めて「平和のため



知事も見学 / 埼玉平和のための戦争展

今年の「戦争展」では第五福竜丸

丸のコーナーを担当することを急に言われて「はぁ？」と思いましたが。そして「大丈夫。資料はそろっているから、あとは勉強するだけ」の一言。あまりにも簡単に言うので、「おいおい」って感じてました。勉強するだけなら喜んでやるんですけどね、さすがに解説をやるって聞いたらときは、時間が少ない中で解説ができるようにどう勉強すればいいのかわからなかった。でも、何とかなると思ってたことにしました。実際、展示館で実物を見てから第五福竜丸には興味があり、何より企画から関わると楽しそうだったからです。

も展示したいのですが何よりもスペースが少なかつたのです。何とかパネルは選べたのですが、大人からアドバイスをもらったら展示したいパネルが増えて展示するスペースを広げてもらいました。

久保山さんの言葉

いよいよ勉強を始めました。展示館から買って来たパンフレットを読み、ノートにまとめました。「第五福竜丸とともに」という本も読みました。その中で死の灰が原因で最初に亡くなった久保山愛吉さんの「自分の体を解剖して今後の調査に役立ててほしい」という言葉、当時の乗組員大石又七さんが体験を語ろうとしたきっかけに感動しました。また原爆症が国に認められないことに腹が立ちました。認められない人はこの第五福竜丸の乗組員だけじゃない。原爆を落とされた広島、長崎だってそうだ。これは国の責任なのだから認められないのはおかしいと心底思います。絶対認めてほしいです。

展示館に行きましょう

そんなこんなでわたしは勉強や資料づくりを進めました。けれど、どんなに本を読んだりまとめ

たりしても不安は消えませんが「解説はOK?」と聞かれると「ヴッ」と言葉が詰まりました。でもやっぱり何とかなるものです。興味を持ってくれる人はパネルの前で止まって見て、私の話をうなずいて聞いてくれるので、「説明を聞いてくれてありがとうございます」と思わずお礼をいってしまいました。

「戦争展」が終わった翌日、資料を返しに再び展示館へ行き、館内も見学しました。去年とは違い余裕を持ちながら見学ができ、新しいことも学べました。「一度行ったことがあるからもういいや」ではなく、何回行ってもまた新しいことが学べると思うので、まだ見学していない人もした人もおすすめの展示館です。

私はこれからもいろいろなことを学びながらこの活動をつづけていきたいと思っています。展示館のとりくみにも参加し、そのはじめは八月二十九日の「福竜丸のエンジンに薬を塗る」作業です。(平和のための埼玉の戦争展スタッフ)



夏休み体験イベントに 元気な小学生の声ひびく

第五福竜丸展示館で初めて催された夏休み体験学習会、「牛乳パックでつくる第五福竜丸」の第一回は七月二四日にひらかれました。



午前二〇時、心配された台風にも見舞われず真夏の暑さのなかを小学三、四年生二六人が元気に集合。ボランティアの会世話人の遠藤昌樹さんの「福竜丸について知り、工作を楽しみ、夏休みの自由研究にも役立てて下さい」とのあいさつではじまりました。

つづいては「第五福竜丸を知ろう」と題して、平和協会の安田事務局長から、漁船福竜丸とマグロのお話、水爆実験に被災した話を聞き、展示館を見て回りました。

「牛乳パックでつくる第五福竜丸」ではボランティアメンバーに教わりながらカッターで紙パックを切り開き、スクリュウをボンドではりあわせ、パックの固い底に切り目を入れて取りつけ、操舵室を作り、マストやエントツを立てて、カラーテープやマジックで彩色して、一時間余りで完成させました。

進水式は、展示館の外にしつらえた小型プールにそれぞれが浮かべ、全員の船がよく走りました。

「むずかしかったけれど、走ってよかった」「福竜丸のことがよくわかった、楽しかった」「死の灰のことがよくわかった。またきたい」「作るのはいへんだったけど、すぐたのしくて、これよかったです。体験学習イベントは八月

二二日、二三日にもおこなわれます。

自転車リレーや反核平和マラソンが展示館から

一九八六年以来十七回目のピースサイクル(反核自転車リレー)、ピースサイクル全国ネットワーク主催が、七月十九日に展示館前に集結しました。二十名の参加者は展示館を見学後、広島、長崎をめざして出発しました。

新日本スポーツ連盟都連など実行委員会による東京反核平和マラソンは八月三日午前二〇時半、展示館まえからスタート、大田区役所までの二五キロのコースで、核兵器の廃絶をアピールして走りま



18歳の看護学生など74名が参加

日米高校生文化交流の代表が来館

恒例となっている日米文化交流のアメリカの高校生(ワシントン)のシドウェルハイスクールなどの九名と日本側のボランティアの大学生六名が、七月三〇日来館しました。

展示館の見学では、協会の川崎会長の案内で約一時間かけて展示を見て説明をうけ、核兵器の問題や平和について感想を述べあいました。一行は、八月三日から広島を訪問、原爆資料館の見学や平和祈念式典に参加し帰国します。